

「猫を巡って」

—二稿—

2026/3/12

〈人物表〉

秋山太郎 あきやまたろう

(28)

しがないサラリーマン

藤本 薫 ふじもと かおる

(28)

太郎と同棲解消した元カノ

藤本由美 ふじもと ゆみ

(21)

薫の妹・実家暮らしの大学生

1. 太郎のマンション・外観（夜）

マンションの一階居室。リビングから漏れる明かり。

2. 太郎のマンション・寝室（夜）

藤本薫（28）、ベッド下の引き出しにあるものを
テキパキと袋に詰めている。

と、写真立てを見つける。中にはテーマパークで撮
影した学生時代の薫と太郎の写真。とびきりの笑顔。
薫、思わず手を止め、一つ息を吐く。

3. 太郎のマンション・リビング（夜）

よくある1LDKの間取り。

その一角、ペット用の皿に入ったまま手付かずの餌。
秋山太郎（28）、落ち着かない様子でウロウロ。

薫、袋と写真立てを手に寝室から出てくる。

意を決して、

薫 「あのさ、昔よくここ——」

太郎 「これ、漫画は？ てか本棚もだよね？」

太郎、気づかず、薫には一瞥もくれない。

薫、ため息。袋をスーツケースに乱雑に投げ入れ、

写真立てをテーブルに伏せる。

薫 「（ぶっきらぼうに） いらない」

太郎 「ああそう。洗面台に化粧品あったけどあれは？」

薫 「いらない。捨てといて」

太郎 「これは？」

と、椅子に掛けてあった猫のクッションを取る。

薫 「いらない（つてば）」

太郎 「あのさ、僕だっぺいらないから聞いてんだからね。粗大

ゴミ出すのもタダじゃないし」

薫 「じゃあ請求してください」

太郎 「何その言い方。請求しろってさ、僕の労力は？」

薫 「じゃあそれも。請求してください」

薫、ペット用のキャリーバッグを開く。

と、何かに気づいて、部屋の至る所を探し始める。

太郎 「何でもかんでもお金で解決しようってさ、君……」

薫、椅子を引いてテーブルの下を見るも何もない。

太郎の声 「君はもう出てくから気にしないでろうけど、この後片

付ける僕の気持ちとかって想像できないんだろうな」

薫、ソファの裏を見るも、何もない。

太郎の声 「そんな風に言われたら惨めな気持ちで片付けなきゃな

んないだろ。僕だっけすぐアメリカ行く準備しなきゃい

けないのに、そういうこと君はさ——」

薫 「チヨボは？」

ベランダへの窓、開いたまま。風で揺れるカーテン。

4. マンション近くの道（夜）

薫、懐中電灯とマタタビなど猫グッズを手に辺りを

探し回っている。

薫 「チヨボちゃん？」

太郎、薫を後から追いかけて、

太郎 「チヨボー？」

5. マンションの脇の植え込み（夜）

二人、植え込みの木々の間を覗き込む。

薫、木の間に手を入れるも、古びた新聞紙を掴む。

6. 駐車場（夜）

二人、車の下を覗き込む。

薫、地面に這いつくばり車の下にライトを差し込む。

7. 細い裏路地（夜）

懐中電灯で照らすと、猫が数匹。

一匹ずつ確認するも薫、肩を落とす。

8. 太郎のマンション・リビング（夜）

薫、太郎のPCデスクに座り、キーボードを叩く。

画面には文書作成アプリで「迷い猫 探してます」

の文字と、チヨボの写真など。

薫 「とりあえず商店街に貼ってもらえないか頼んでみる」

太郎 「なら俺やるよ。早い方がいいだろうし」

薫 「いいの？」

太郎 「(頷いて)明日、仕事あるでしょ？」

薫 「……ありがとう」

薫、立ち上がり、スーツケースとペットキャリーを持って玄関に行こうとする。

太郎 「え、なんで？」

薫 「え？」

太郎 「それ」

と、ペットキャリーを指差す。

太郎 「見つかるならこの辺でしょ。また持ってくるならいいけど」

薫 「ああ、そうか」

と、ペットキャリーを置こうとするも、

薫 「え、そしたら私、取りに来るって事？」

太郎 「一旦僕が預かることになるんじゃない？」

薫 「いいよ。電話してくれたとこに直接取りに行くから」

と、再びペットキャリーを持って行こうとする。

太郎 「あ、これ、僕の電話番号の方がいいな」

と、キーボードをカタカタ。

薫 「は、何？」

太郎 「僕がこれ配るのに女の子が出たらびっくりするでしょ」

薫 「しくない？」

太郎 「するって」

薫 「しないでしょ」

と、キーボードを奪おうとする。太郎、制する。

太郎 「いや、商店街のお店に配るわけだからさ、一応住んでる人の連絡先の方がその、道理としてさ——」

薫、ドンっと、再びペットキャリーを置く。

太郎、驚く。

薫、気の抜けたような顔になって、

薫 「……今日で全部スッキリするつもりだったのになあ」

太郎 「……はあ？ ただの親切なんだけど。どうしていちいち

「そうやって嫌な気持ちにさせるの君って」

薫 「ねえ、君って呼ぶのやめてってば」

太郎 「……それは、ごめん」

薫 「もう、別にいいけど」

9. 商店街の魚屋の前（昼）

太郎 「三毛猫で、お腹のあたりに黒いハートみたいな斑点があるんです。よろしくお願いします」

と、深々と頭を下げる。

魚屋夫婦の店主と女将、笑顔で頷く。

ポスターの束を片手に隣の店へと駆け出す。

太郎 「すみません。猫を探してて……」

10. 薫の職場オフィス（昼）

薫、デスクでパソコン仕事中。

と、上司がやってきて、

上司 「藤本さん、ちょっといい？」

薫 「はい？」

上司 「……プロジェクトの件さ、考えてくれた？」

薫、不意を突かれて狼狽える。

薫 「……すみません。まだちょっと、決められてなくて」

上司 「そっか。引き続き藤本さんPMで行こうと思ってるから」

薫 「はっ」

上司 「来週中にはお願いね」

薫 「すみません。ありがとうございます」

と、どこか浮かない顔。

スマホに通知。画面を見ると「商店街に貼り紙してもらった」「公園の掲示板にも」などなどこまめに太郎からの連絡。「ありがとう」とだけ返事。

薫、スマホを伏せて、仕事を続ける。

11. 太郎のマンション・リビング（夜）

太郎 「そうですね。ごめんなさい、そちらの子じゃないです」と、電話を切り、一息を吐く。

床には大きな旅行鞆やキャリーケースが広げられていて、荷造りの途中。
その一角、ペット用の餌。手付かずのまま。

12.

薫の実家・リビング（夜）

薫、タオルで髪を乾かしながら風呂場から出てくる。
と、妹・藤本由美（21）がちょうどやってきて、

由美 「あれ、お姉ちゃん何でいんの？ 喧嘩した？」

薫、素通りしようとして、捕まる。

由美 「ねえってば」

薫 「……別れた」

由美 「えー！ なんで？」

と、絶句。

薫 「うるさい」

由美 「え、なんでなんでなんで？」

薫、由美のやかましさに諦めて腰を下ろす。

由美 「こんなにお姉ちゃんのこと好きな人いないって、自分で言ってたじゃん」

薫 「そうだったけ」

由美 「言ってたよ」

薫 「まあ、それは今でもそうなんだと思う」

由美 「急にノロケないでよ」

薫 「なんでかなんて、知らないよ」

由美 「は？」

薫 「フラれたの」

由美 「えっ？」

薫 「フラれたの。アメリカに転勤するの嫌だって駄々こねたら、なんか喧嘩しちゃって」

由美 「仲直りすれば？」

薫 「まあ、会えなくなるのはそうだしさ」

由美 「お姉ちゃんが着いてればいいじゃん」

薫 「私だって今会社で大きいプロジェクト任せれそうなの」

由美 「何それ。わざわざウチからチョコ奪ってまで同棲したのに。ただの言い訳でしょ」

薫 「うるさい」

由美、合点が行かず、

由美 「もう意味分かんない。馬鹿じゃないの」

と、立ち去る。

13. 商店街の魚屋（昼）

魚屋の女将、腕を組んで満面の笑み。

対する太郎、手にはペットキャリー。

中でチヨボが毛繕い。

女将 「よかったねえ」

太郎、控えめに頭を下げる。

女将 「……もっと喜ぶのかと思ってた」

太郎 「え？」

女将 「あんなに必死に走り回ってたから。ものすごい形相だったじゃない。だからこの子のこと、覚えてたんよ」

女将、ペットキャリーを小突く。

女将 「もう勝手に出てっちゃダメだぞ。こんな大事にしてくれる人、なかなかいないんだから」

と、奥で居眠りしていた店主がくしゃみ。

女将 「お兄ちゃんもね、大事なんだったら手放しちゃダメだよ。

猫も、女の子も。はははは」

太郎 「あ、ははは」

と、愛想笑い。

14. 太郎のマンション・リビング（夜）

リビングは片付けられていて、もぬけの殻。

太郎、大きなキャリーケースや荷物を持って玄関へ。

ふと、テーブルに伏せられた写真立てを見つけて、

目を見開く。

と、インターホンが鳴る。

15. 太郎のマンション・玄関（夜）

太郎、チヨボの入ったペットキャリーを差し出す。

薫、受け取る。

薫 「ありがとう」

薫、チヨボを見て、思わず満面の笑み。

太郎 「……じゃあ」

と、閉めようとする。

薫 「もう、行くの？」

太郎 「……うん」

薫 「中入ってもいい？」

太郎 「え？」

薫 「……エサ、あげようかなって」

太郎、腕時計を見て、

太郎 「ごめん、飛行機すぐだから」

16. マンション近くの道(夜)

太郎 「……どこまで着いてくんの？」

と、キャリーケースを引いてスタスタ歩いている。

薫 「私もこっちだから」

薫、着いていくが、チヨボが重そう。

太郎 「ああそう」

薫 「うん」

太郎 「いいな。チヨボは」

薫 「え？」

太郎 「こうやって迎えに来てもらえてさ」

薫 「無理やり連れてきたんだから、責任くらい取りますよ」

太郎 「僕が帰ってくる時も、誰か来てくれないかな」

薫 「私も」

太郎 「え？」

薫 「チヨボが羨ましい。私みたいなこーんなに思ってくれる人がいて。私がどこに行く時でも、彼氏と同棲することになっても同棲解消しても、いつでもそばにいてくれて」

太郎 「あのさ」

薫 「そうやって。無理やりにも連れてってくれる人がいて」

太郎 「それは君が仕事があるって——」

と、薫に睨まれる。

太郎 「ごめん、薫が。薫が、こっちでの仕事頑張りたいって言

ったからじゃんか。僕だつてずっと一緒にいると思ってたし、いたかったけど、仕方ないだろそれは」

薫 「重い」

と、立ち止まる。

太郎 「……ごめん」

薫 「……これ（のこと）」

と、ペットキャリーを差し出す。

太郎、受け取る。

太郎 「……重いな」

太郎、荷物だらけになり、身動きが取れない。

と、タクシーが通りがかり、太郎、止める。

バックドアにキャリーケースを入れて、ペットキャリーを持ったまま、客席に乗り込む。

薫、あっけに取られる。

太郎 「（運転手に）空港まで」

薫 「ちよつと？ チョボは？」

太郎 「だって、どこまでも着いてくるんですよ」

と、薫に手を差し出す。

キャリーの中のチョコボ、呑気そうにあくび。

薫、観念して笑う。太郎の手を取って、乗り込む。走り出すタクシー。

太郎のカバンのポケット。写真立てが覗いている。

（おわり）